

公益財団法人国際文化フォーラム

2016(平成28)年度 事業報告及び附属明細書



2016 年度も当初計画していた事業を概ね順調に実施することができました。以下、2016 年度の事業のポイントをご報告いたします。それぞれの事業全体の報告は、6～11 ページに掲載しています

◆中国の第二外国語としての日本語教育の促進——ア-1. 中国日本語教師研修の実施

中国の第二外国語としての日本語教育は、履修形態や時間数もさまざまで、自分のクラス目標にあわせて教員が教科書の内容を調整する必要があります。TJF が 3 月に上海で実施した研修は、テーマを「教科書『を』教えるから教科書『で』教える」とし、中国各地から約 50 名の教師が参加しました。

また、現在進められている教育部の課程標準の改訂で、第二外国語教育が制度として位置づけられることを期待して、『好朋友』第 3-5 巻の市販化を計画していましたが、今回の改訂では制度化されていないことが明らかになりました。より多くの学校で『好朋友』が提案する新しい日本語教育を取り入れてもらうことが中国中等の日本語教育を促進することにつながると考え、そのための予算を使って 2017 年度に市販化済みの第 1 冊、第 2 冊の追加買い上げ・寄贈をすることとしました。すでに、数校から寄贈申請が届いています。

◆日本語教育への「めやす」の活用——ア-2. 「外国語学習のめやす」活用をめざしたワークショップの開催

2014 年度より「めやす」マスターと共同でワークショップを開催するなどして、「めやす」の活用を促進してきました。2016 年度は、大学院生を対象とした合宿型の研修や「外国語学習のめやす」をテーマにした大学の FD 研修(教員の教育能力を高めるための研修)など、日本語のマスターの企画が複数実施されました。

日本語のマスターの 1 人が日本語教育に「めやす」を活用したいと考えたのは、「『外国語学習のめやす』では外国語教育を人間教育の一環として捉え、グローバル社会を生き抜く力の育成をめざしており、日本語を学習することが、日本語や日本文化だけではなく、自分の文化を再発見し、ほかの国について、グローバル社会として理解を深めることができると、学生に明確に提示できるから」だと話します。

◆プロジェクト学習・探究学習のワークショップ——ア-3. 教員および生徒を対象とした講演、ワークショップの実施

TJF は 2015 年度から、授業設計などがご専門の稲垣忠・東北学院大学教養学部教授に講師を依頼した研修を実施しています。

2016 年度は、「子どもたちが主体的に情報を集め、吟味し、じっくり考えて編集、創造し、切実感をもって他者と伝えあう」という情報活用型プロジェクト学習をテーマとした 2 つのワークショップを東京で開催しました。

「探究する学びをデザインしよう——プロジェクト学習でことばと情報をフル活用する単元づくり」と題したワークショップは、実践経験の有無にかかわらず参加できる内容で、全国から 30 人の先生がたが参加しました。児童・生徒にとってのゴールを考えるとところから始まり、情報の収集・編集・発信の 3 つのステップをインタビュー、観察・実験、比較、関連づけ、プレゼンテーション、質疑応答、ふりかえりなど 21 の学習活動に分類したカードを使いながら単元を組み立てました。最後に、思考の深さと表現の巧みさに焦点をしばったルーブリック(評価基準)をつくることで、自分がデザインしたプロジェクト学習の学びの質の見極めを試みました。

実践経験者向けの「プロジェクト学習、探究学習のリフレクション・ブラッシュアップ」は、フィードバックをていねいに行うため、少人数限定(5人)で実施しました。プロジェクト学習デザインの点検シートをつかひながら、参加者それぞれが自分の実践を分析した結果、「生徒のふりかえりを深める質疑応答とは」、「学習者が自分の成長を実感するには？」の2点が共通する課題として浮かびあがり、グループに分かれて解決のためのアイデアを考えました。

「頭の中であいまいにしていたことを整理でき、学習活動を再構成できた」、「教師目線で生徒のふりかえりをデザインしていたために個々の生徒の状況に合ったふりかえりができていなかったことに気づいて軌道修正できた」など、参加者からは概ね高い評価をいただきました。

◆外部機関と共催する「隣語講座」の試み——ア-4. 隣語講座の開催

隣語講座の開設数、開設範囲などを拡大するためには、実施を希望する機関(学校、公民館、国際交流協会等)が会場提供、講座希望者募集を担当し、TJF がカリキュラム作成支援、講師派遣を行う新しいかたちが必要だと考え、2016年度は一つのモデルケースとして、「みなと総合高等学校多言語多文化共生理解部の隣語講座」に協力し、全9回の韓国語講座を開講しました。

講師と講座管理者のコミュニケーション不足などいくつかの課題が浮かびありましたが、それらを改善しながら、2017年度は浜松でインドネシア語講座の開講準備を進めるなど、新たな地域、対象言語で展開していきます。

◆くりっくにつぼんの取材プロセスを学生が体験——イ-1. 日本の文化と人びと紹介サイト「くりっくにつぼん」の運営

武蔵野美術大学の留学生を対象とする「日本事情」の授業に、くりっくにつぼんの My Way Your Way コーナーを使わせてほしいとの依頼があり、これに協力しました。一連の活動の中で、学生たちが文化の多様性に気づいたり、粹にはまっていない文化を感じたりしながら、記事づくりすることができるのかどうか、検証したいと考えたからです。

学生たちに自分が興味のある「日本」をテーマに選ばせ、そのテーマに関連する人に考えや生き方をインタビューさせて、記事にまとめてもらい、TJF のウェブサイト内に開設した「ときめき取材記」に掲載しました。留学生の視点を取り入れることで、より多様な日本を紹介できるというねらいもありました。

視点をさらに多様なものにしたいと考え、2017年度は、日本人学生と留学生を対象とする大学の日本事情、ニュージーランドの大学の日本語の授業に協力することにしました。ここから得たフィードバックを分析し、この試みの有効性の検証と今後の方向性を見極めていきます。

◆日韓で互いのことばを学ぶ中高校生が交流——ウ-1. 日韓の中高校生交流プログラムの実施

5回目となる日韓の中高校生ダンス交流プログラムを、8月にソウルで実施しました。このプログラムでは、ダンスを作り上げていくプロセスを大事にしてきました。今回はそのプロセスを写真数枚で表現する「私たちの物語」も同時に実施しました。

発表会ではダンスとともに、「私たちの物語」を日本語と韓国語を交えて紹介し、チームをアピールしました。会場に集まった、韓国の生徒の家族や友人、

日本の高校の校長先生など約 100 名がダンスと「私たちの物語」の総合評価で審査を行いました。

◆日韓で 3 組の姉妹校交流が開始——ウ-2. 日韓の高等学校校長交流プログラムの実施

8 月に実施した日韓校長交流プログラムには、東京、神奈川に加え、埼玉、千葉、広島 の 11 校から各校 1 名ずつ校長など管理職の参加がありました。ソウルで開催した日韓校長交流会には、韓国側から日本語を実施している中学・高校の校長および日本語教師約 20 名が出席しました。

11 月に、こちらは国際フレンドシップ協会と共催で実施した、韓国から日本への招聘プログラムに、8 月の交流会に参加した韓国の校長のほとんどが、各校生徒 2 人を連れて参加しました。神奈川で日韓の校長が再会する交流ができ、互いに理解を深めあったことで、神奈川県立弥栄高等学校／東灘中央高等学校(京畿道)、東京都立日比谷高等学校／ミチュホル外国語学校(仁川市)、神田女学園中学・高等学校／ソウル女子高等学校の 3 組の学校が姉妹校協定を締結あるいは締結に向けて準備を進めています。

2017 年度は、昨年同様 2 回の校長交流会(東京の交流会は、日韓文化交流基金への企画公募申請が採択されることが前提)を実施し、学校間交流のきっかけづくりを行うとともに、国際交流基金ソウル日本文化センターや日本にある韓国教育院と役割を分担しながら、交流継続のためのフォローアップ体制をつくっていきます。

◆日露の教師・生徒の交流プログラム——ウ-3. 日露の教師・生徒交流プログラムの実施

2015 年度にロシアの日本語教師を招聘し、日本の高校のロシア語教師と合同研修を実施することから開始した日露交流プログラムの 2 年度めは、日本の高校ロシア語教師とロシア語学習者を 9 日間、ロシアのノボシビルスクとモスクワに派遣しました。参加者は、2015 年度の「日露教師合同研修」に参加した教師 7 名とその教師が推薦する生徒 19 名です。

ロシア滞在中は、日本語教育実施校を訪問し教師や生徒と交流する時間をもったほか、ノボシビルスクにあるシベリア北海道文化センターなどの全面的な協力のもと、高度な専門教育を行っている音楽学校訪問や日本語学習者の家庭でのホームステイ、ロシア正教の教会で行われたティーパーティーへの参加など、できるだけ多くの場面で、ロシアの人々の生活に触れられるプログラムを組みました。

参加者の一人から、「今回の旅でよかったことは、さまざまな学校、施設、場所に行けたことだ。特にノボシビルスクとモスクワの両方に行けたことは大きいと思う。なぜなら、その場、その土地で人々の考え方が違っているからだ」というプログラム全体への感想が寄せられました。

2016 年度実施事業の一覧及び各事業の報告

ア. 国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業

- (1) 中国日本語教師研修の実施
- (2) 「外国語学習のめやす」活用をめざしたワークショップの開催
- (3) 教員および生徒を対象とした講演、ワークショップの実施
- (4) 隣語講座の開催
- (5) ネットワーク構築と情報収集

イ. ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発や提供事業

- (1) 日本の文化と人びと紹介サイト「くりっくにつぼん」の運営
- (2) 「外国語学習のめやす」ウェブサイトの運営
- (3) ネットワーク構築と情報収集

ウ. 互いのことばを学ぶ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業

- (1) 日韓の中高校生交流プログラムの実施
- (2) 日韓の高等学校校長交流プログラムの実施
- (3) 日露の教師・生徒交流プログラムの実施
- (4) ネットワーク構築と情報収集

エ. 広報事業

- (1) TJF の事業の広報
- (2) TJF 設立 30 周年記念事業

事業名	実施時期	実施場所	事業内容	関係機関/団体
公1 国内外の児童及び青少年を対象とした外国語教育、並びに多様な文化についての理解を促進するとともに、教育及び文化の交流を推進する事業 119,055,658円（内、公益目的事業共通費用 74,259,659円 ※）				
ア. 国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業				10,760,071円
1	中国日本語教師研修の実施(定期事業) 決算額:2,664,253円 (予算額:6,410,000円) 差額:3,745,747円 減少理由:『好朋友』の買い上げ・寄贈の実施が2017年度になったため	3月 中国上海市	①中等日本語教師研修の実施 中等日本語課程設置校工作研究会の会員校の日本語教師、東北三省(吉林省、黒龍江省、遼寧省、大連市)の日本語教師およびその他の地域で『好朋友』を使った授業を行っている教師および指導主事計53名が参加する教師研修を、上海で実施した。研修のテーマは、は、「教科書を教えるから教科書『で』教える」とし、中国の課程標準(学習指導要領に相当)が外国語学習でめざしているのは何かについて学びつつ、その目標を達成するためには、与えられた教科書をどのように料理(テキストブックアダプテーションを行って)授業を組み立てればよいか、グループで考えポスター発表を行った。 なお、年度当初に予定していた、『好朋友』第3-5冊の市販化は、①教育部が進めている課程標準(学習指導要領に相当)の改訂に伴い、第二外国語教育が制度化されることが期待されていたが、今回の改訂では第二外国語教育の制度化には触れられないことが明らかになったため、市販化しても販売の見込みがないことが明確となった、②第二外国語としての日本語の授業に取り組んでいる学校の教師たちから、授業時間数を勘案すると、第2冊までが限界で、第3-5冊を使いこなすことは難しいという意見が大半を占めたこと、である。 こうした状況に鑑みし、2016年度に予定していた第3-5冊の市販化・買い上げ・寄贈を見送る代わりに、第1,2冊、各3000部の買い上げ、新しく第二外国語としての日本語を開講する寄贈することとした。なお、買い上げ・寄贈は2017年度に実施する。この寄贈を通して、一つでも多くの学校にまず『好朋友』を使った日本語の授業に取り組んでもらうことをめざす。	協力:中国中等日語課程設置校工作研究会、中国教育学会外国語専業委員会日本語部 会場協力:上海工商外国語学校 助成:(公財)三菱UFJ国際財団
2	「外国語学習のめやす」活用をめざしたワークショップの開催(定期事業) 決算額:729,604円 (予算額:1,567,000円) 差額:837,396円 減少理由:共催での実施により、TJF負担の経費が減少したため	通年 国内各地	2016年度は「外国語学習のめやす」マスター研修修了者(「めやす」マスター)との共同企画、または「めやす」マスターの自主企画に協力する形で、以下のワークショップ等を実施しました。2016年度は、「学習のめやす」の日本語教育関係者に活用してもらうことに力をいれました。 ①8/18、大阪大学大学院言語文化研究科主催の日本語夏合宿における「めやす研修」に協力(京都/院生、修了生34名が参加) ②9/3 「めやす」マスター有志と「外国語学習のめやす」韓国語教師研修を共催(東京/参加者12名) ③10/29 宮城学院女子大学日本文学科日本語教員養成課程主催、日本語教育における「外国語学習のめやす」研修会に協力(仙台/参加者40名) ④11/19 立命館アジア太平洋大学のFD研修としての「めやす」研修に協力(大分/参加者22名) ⑤2017/2/11 「めやす」マスター有志と「外国語学習のめやす」セミナーを開催(大阪/参加者30名) そのほかにも、神田外語大学の教職課程在学中の学生による高校生対象の「スペシャルレッスン」や和歌山県高等学校中国語教育研究会研究協議会「めやす」を取り入れた公開授業に協力した。	②と⑤ 共催:「めやす」マスターティーチャー

3	<p>教員および生徒を対象とした講演、ワークショップの実施(定期事業)</p> <p>決算額:4,111,427円(予算額:5,678,500円) 差額:1,567,073円</p> <p>減少理由:北海道で実施を予定していたCMワークショップが先方とのスケジュールがあわず未実施となったため</p>	<p>①6月、7月、8月、11月</p> <p>②8月、3月</p> <p>③9月、10月</p> <p>④6月、11月</p>	<p>①大阪、沖縄、北海道</p> <p>②東京</p> <p>③東京</p> <p>④沖縄、北海道</p>	<p>① 評価等についてのレクチャー・ワークショップ(小中高校大学の教員向け) 當作靖彦カリフォルニア大学サンディエゴ校教授に講師を依頼し、主に評価に焦点をあてた研修を各地で開催した。TJFが大阪、札幌で主催するレクチャー・ワークショップはそれぞれ3年目と4年目、沖縄県教育委員会と共催実施の研修は5年目を迎え、各会場とも100人前後が参加した。レクチャーでは、講義中心の教育からアクティブラーニング中心の教育への変化が評価にどのように影響を与えているかを概説し、ワークショップでは、アクティブラーニングの効果的な評価方法とされるパフォーマンス評価やオーセンティック(真正)評価づくりに取り組んだ。 また、昨年に引き続き、大阪府教育センターからの要請により、大阪府立学校の導教諭約100名を対象に「生徒主体の学習の評価」について、校長・教頭約80名を対象に「21世紀が必要とする教育」をテーマとしたレクチャーの実施に協力した。そのほか、新たに大阪府の豊中市教育委員会の豊中市近隣の小中学校の教頭向けおよび教員向けに行う研修や、北海道高等学校英語教育研究会の第10回セミナーでの記念講演(約200人参加)、北海道の滝川国際交流協会・滝川市主催の市内の教員・学生や議員を含む市民向け講演(約90人参加)の開催にも協力した。</p> <p>② プロジェクト学習や探究学習のワークショップ(小中高校の教員向け) 稲垣忠・東北学院大学准教授(教育工学)に講師を依頼し、入門編として「探究する学びをデザインしよう～プロジェクト学習で言葉と情報をフル活用する単元づくり」のワークショップ(30人対象)を開催した。また、経験者向けには、自分の実践をゴール設定、ルーブリック、具体的な学習活動のデザインなどに着目しながら整理・分析し、課題を解決して、さらに磨くための少人数限定のワークショップ「プロジェクト学習、探究学習のリフレクション&ブラッシュアップ」(5人対象)を実施した。</p> <p>③ CMづくりワークショップ(小中高校の教員向け) 教員の発信力向上や日頃の教育実践のふりかえりを目的としたCMづくりワークショップの第3回目を2日間にわたって実施した。6人限定で、プロのCMプランナーのファシリテーションのもと、自分の授業で大切にしたいことや教師として伝えたいメッセージなどを深く掘りさげ、生徒や同僚、管理職など、具体的な相手を想定して伝わる表現を追求してCMのコンセプトづくりと映像制作を行なった。</p> <p>④ 高校生向けの講演 沖縄と北海道の高校から依頼を受け、當作靖彦カリフォルニア大学サンディエゴ校教授による「21世紀を生きる生徒に求められる力」をテーマとした講演の開催に協力した。沖縄県立普天間高等学校では創立70周年の記念講演として実施し、全校生徒1200名が参加、沖縄県立向陽高等学校では2年生と3年生の全クラス480名が聴講した。また、北海道滝川西高等学校でも、全校生徒830名を対象とした講演を実施した。</p>	<p>①共催:沖縄県教育委員会、国際教育活動ネットワークREX-NET(大阪会場) 後援:札幌市教育委員会、北海道教育委員会 協力:高等学校中国語教育研究会北海道支部、国際教育活動ネットワークREX-NET(札幌会場)、実用英語教育学会(SPELT)、北海道高等学校英語教育研究会</p>
---	---	--	--	---	--

4	<p>隣語講座の開催 (定期事業)</p> <p>決算額:643,577円(予算額:981,200円) 差額:337,623円</p>	通年	東京ほか	<p>①2012年から実施している駐日韓国文化院世宗学堂と「中学生のための韓国語講座」を共催したほか、拓殖大学第一高等学校韓国語講座にも継続して協力した。</p> <p>②東京都高等学校総合学科教育研究会との共催で、都内の総合学科に通う高校生、その保護者、教師と一緒に参加できる講演会「世界の言語と文化を知ろう」の第2回、3回を開催した。第2回は、テーマを「日本を好きな中国を知ろう」とし、神戸国際大学の毛丹青教授に講師をお願いした。中国の若者が日本についてとても詳しくなっている一方、日本の若者は中国について全く知らないという「知の格差」が発生していることについて参加者間で意見を交換しました。また第3回は、張玥先生と張河林先生を講師に迎え、中国語と韓国語両方の入門講座を受講してもらうとともに、中国語や韓国語を学んだ現役大学生5名に協力してもらい、グループに分かれて彼らの話を聞いたり、彼らに質問したりすることを通じて、中国語と韓国語への関心を高めてもらうことを試みた。</p> <p>③学校などの機関と共催で実施する隣語講座のパイロットプログラムとして、「みなと総合高等学校多言語多文化共生理解部の隣語講座(韓国語)」(全9回)への講師派遣とカリキュラム作成協力を行った。</p>	<p>①韓国語講座(世宗学堂) 共催:駐日韓国大使館韓国文化院</p> <p>②保護者、教師、生徒向け講演・講座 共催:東京都高等学校総合学科教育研究会 助成:漢語橋基金(中国語関連)、東京韓国教育院(韓国語関連)</p> <p>③共催:みなと総合高等学校多文化共生理解部</p>
5	<p>ネットワーク構築と情報収集 (定期事業)</p> <p>決算額:2,611,210円(予算額:2,603,076円) 差額:△8,134円</p>	通年	国内各地	<p>Aの事業に関連する国内外の研究会や会合等に参加し、ネットワークを広げるとともに、情報収集とTJF事業の広報に努めた。</p>	

イ. ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発や提供事業

10,142,130円

1	<p>日本の文化と人びと紹介サイト「くりっくにっぽん」の運営(定期事業)</p> <p>決算額: 7,943,291円(予算額: 9,466,274円) 差額: 1,522,983円</p> <p>減少理由: 取材先が東京近郊で交通費がかからなかったため</p>	<p>通年</p>		<p>ウェブのコンテンツとしては、「My Way Your Way」で「身近なものでアート」と「ダンス」をテーマにした記事を掲載し、「ロボット・AI」の企画・取材を進めた。読者増をめざして、昨年度に引き続き以下を行った。</p> <p>①中国の大手SNSの微博に開設した「点击日本」でくりっくにっぽんの記事紹介などを配信 ②英語圏の日本語教師向けのメルマガ「Click Nippon News」も引き続き月2回の定期配信 ③韓国では中高校日本語教師ネットワークJTAと連携して「くりっくにっぽん」を活用した授業案の開発およびJTAウェブサイト上の「くりっくにっぽん」コーナーに記事とともに掲載</p> <p>日本語教師対象には、オーストラリアでは2年に1度開かれる日本語教育シンポジウムで、現地の日本語教育専門家による「くりっくにっぽん」のセッションを実施し、韓国ではJTA企画の「くりっくにっぽん」のワークショップや実践報告会に協力した。また、東京都立青梅総合高校の総合学習の時間に、修学旅行でグアムに行く2年生を対象に特別講義「日本を発信すること」を行った。</p> <p>2016年度は新たに武蔵野美術大学の留学生を対象とする「日本事情」の授業に協力し、「くりっくにっぽん」の「My Way Your Way」コーナーで行っている企画・インタビュー・記事作成の一連の作業に学生が取り組んだ。TJFのウェブサイト内に「ときめき取材記」をオープンし、学生が作成した記事6本を掲載した。また、この実践のプロセスを可視化し、ほかの実践希望者と共有するために、「外国語学習のめやす」マスターである田中祐輔氏に講師を依頼し、希望者5人を対象に2回の勉強会を行い、それぞれの現場で2017年度に実施する活動案を作成した。</p>	
2	<p>「外国語学習のめやす」ウェブサイトの運営(定期事業)</p> <p>決算額: 504,840円(予算額: 594,000円) 差額: 89,160円</p>	<p>通年</p>	<p>TJFウェブサイト</p>	<p>『外国語学習のめやす』冊子の市販終了に伴い、「めやすweb」に冊子のPDFを掲載するとともに、「多言語への広がり」というコーナーを新設して、「めやす」紹介動画の多言語化をはかり、各言語の学習スタンダード作りの動きも紹介した。既存のコーナーについてもコンテンツを整理し、見やすく改訂を行なった。また、「めやす」ワークショップの参加者が作成した授業案や「めやす」マスターによる授業実践報告も掲載した。</p>	
3	<p>ネットワーク構築と情報収集(定期事業)</p> <p>決算額: 1,693,999円(予算額: 2,044,720円) 差額: 305,721円</p>	<p>通年</p>	<p>①日本国内各地 ②中国各地</p>	<p>①この事業に関連する国内外の研究会や会合等に参加し、ネットワークを広げるとともに、情報収集とTJF事業の広報に努めた。</p> <p>②講談社より提供していただいた図書を、(公財)日本科学協会を通じて、日本語科があり学習者数の多い重点大学に寄贈することを通じて、それらの大学とのネットワークを広げた。</p>	

ウ. 互いのことばを学ぶ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業				15,561,402円	
1	<p>日韓の中高校生交流プログラムの実施(定期事業)</p> <p>決算額:3,611,212円(予算額:5,065,243円) 差額:1,454,031円</p> <p>減少理由:会場借用費を共催者への助成金で充当したため</p>	8月	韓国ソウル市ほか	<p>韓国語を学ぶ日本の中高生18名と日本語を学ぶ韓国の中高校生18名がソウルで5日間の合宿をしながらK-POPダンスをテーマに交流するプログラムの第5回めを行った。日本側は、今年度より文部科学省に全国の中学、高校への周知で協力いただき、過去最多の応募数があった。</p> <p>日韓の中高校生は、5日間、チームに分かれてダンスの練習に取り組み、最後に発表会で成果を披露した。各チームはダンス披露の前に、ダンス完成までの3日間のプロセスを写真5枚で紹介する「私たちの物語」の発表を行った。メンバー紹介、3日間の楽しかったときとしんどかったとき、アピールポイント等を、日韓の両言語で紹介した。会場には韓国の生徒の家族や友人、日本の高校の校長先生など約100名がゲストとして来場し、ダンスと「私たちの物語」の総合評価で6グループのダンス/の審査を行いました。</p>	<p>企画・共催:(財)秀林文化財団 共同実施:秀林外語専門学校、韓国日本語教育研究会 助成:(公財)双日国際交流財団、国際交流基金ソウル日本文化センター 協力:高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク 輸送協力:ANA</p>
2	<p>日韓の高等学校校長交流プログラムの実施(定期事業)</p> <p>決算額:1,899,198円(予算額:2,530,840円) 差額:631,642円</p>	①8月6-9日	②韓国ソウル市	<p>①日本の校長の韓国派遣プログラム 2015年度に続いて、東京と神奈川の韓国教育院と共催で日本の高校の管理職を韓国(ソウル)に派遣した。東京、神奈川以外の地域からも派遣してほしいという要望に応え、埼玉、千葉、広島からの参加者も含め、高校の管理職等10名を韓国ソウルに派遣した。参加した校長が、自分の学校の生徒が研修旅行でソウル訪れる時に参考になる日程を組み、日本語教育実施校を訪問し日本語学習者と交流やソウルに留学中の日本人学生との交流、ソウルの今と昔を知る名所旧跡を訪問したほか、TJF等が共催する日韓の中高校生交流のプログラムの見学などを実施した。また、国際交流基金ソウル日本文化センターと共催の「日韓校長・教師交流会」では、互いの言語を学ぶ意義を再確認し今後の学校間交流の可能性を検討した。</p> <p>②韓国の校長と生徒の日本招聘プログラム 4月に(公財)日韓文化交流基金が公募した「JENESYS2016」韓国との間の招へい・派遣事業に一般社団法人国際フレンドシップ協会との共催で申請し、11月に韓国で日本語教育を実施している高校11校からそれぞれ校長と生徒2名および引率2名を含めた計35名を招へいする事業を実施した。招聘対象は、①の事業で実施した日韓校長交流会に参加した学校とした。</p> <p>①、②のプログラムを実施した結果、3組が姉妹校交流協定を締結もしくは締結に向けての話し合いを開始するなど、継続性のある交流につながった。</p>	<p>①共催:東京韓国教育院、神奈川県教育院、国際交流基金ソウル日本文化センター(一部共催) 輸送協力:ANA</p> <p>②共催:(一社)国際フレンドシップ協会 輸送協力:ANA</p>

3	<p>日露の教師・生徒交流プログラムの実施(定期事業)</p> <p>決算額:8,569,322円(予算額:7,189,000円) 差額:△1,380,322</p> <p>増加理由:訪口時に、モスクワ、サンクトペテルブルグで教師研修を追加実施したため</p>	9月15日-24日	モスクワ、ノボシビルスク	日本の高校ロシア語教師とロシア語学習者計7校から19名を9日間、ロシアのノボシビルスクとモスクワに派遣した。参加者の内訳は、2015年度に東京で実施した「日露教師合同研修」に参加し、且つ所属学校長の承認が得られた教師7名と、教師の推薦を受け、所属学校長の承認が得られた生徒12名とした。ロシア滞在中の活動は、日露において互いのことばと文化を教える教師同士、互いのことばを学ぶ高校生同士の交流に主眼を置き、ことばと文化を学び続ける意欲の向上と、相互理解の促進をめざした。具体的なプログラムでは、日本語教育実施校・関係機関を訪問し、体験や交流の時間をもつとともに、昨年度に続いて日露で互いのことばを教える教師たちの合同研修も実施した。また、生徒たちは、日本語学習者の家庭でホームステイした。訪問した学校で、日本の教師が日本語を学んでいないロシアの生徒を対象に、日本語や日本文化を体験する授業を行い、生徒たちの日本語学習への関心を高める効果をもたらした。	助成:(一社)尚友倶楽部 実施協力:シベリア北海道文化センター(ノボシビルスク市)、高等経済学院(モスクワ市)、国際交流基金モスクワ暫定事務所(モスクワ日本文化センター) 輸送協力:JAL
4	<p>ネットワーク構築と情報収集(定期事業)</p> <p>決算額:1,481,670円(予算額:2,832,000円) 差額:1,350,330円</p> <p>減少理由:スタッフの勉強会、セミナー等の参加が予定より少なかったため</p>	通年	各地	ウの事業に関連する国内外の研究会や会合等に参加し、ネットワークを広げるとともに、情報収集とTJF事業の広報に努めた。	
<p>エ. 広報事業</p>					8,332,396円
1	<p>TJFの事業の広報(定期事業)</p> <p>決算額:8,155,191円(予算額:11,056,919円) 差額2,901,728円</p> <p>減少理由:ウェブサイト改訂を次年度以降にずらしたため</p>	①8月A4変型、40頁、4,500部 ②通年	TJFサイト、メールマガジン、東京ほか	<p>①事業報告書『CoReCa』の発行 8月末に発行した事業報告書『CoReCa』では、2015年度に実施した各事業を参加者や関係者の声を交えて報告した。また、特集では、昨今話題になっている「アクティブラーニング」をより深い学習に結び付けるにはどうしたらいいのかを考えるとともに、実践例もあわせて紹介した。また、特別企画として、2006年から10年にわたって取り組んできた『外国語学習のめやす』プロジェクトを振り返った。</p> <p>②デジタル媒体を使った広報 月2回発行しているメールマガジン「わやわや」では、2016年1月に始めた郷土料理研究家・青木ゆり子氏執筆のシリーズ「おいしい話あります！」(月1回)を継続し、それに連動して、インターネットラジオの配信を2016年12月まで行った。そのほか、Facebookを通じてTJFの日々の活動の様子も配信した。</p> <p>さまざまなことばや文化に触れてみるイベント「りんごをかじろう」は、「たいへんな時代を生き抜くための イラン式7つの極意」、「モノ研究の魅力 --ナマコとクジラ、ヤシとバナナから見える世界」をテーマに実施した。</p>	
2	<p>TJF設立30周年記念事業</p> <p>決算額:177,205円(予算額:2,000,000円) 差額:1,822,795円</p> <p>減少理由:記念事業が国内実施となったので、海外出張がなかったため</p>	通年	国内各地	30周年記念事業として実施を予定している、高校生向けの学校外の学びの場づくりや、多言語パフォーマンス合宿、30周年記念レセプション等の準備作業を実施した。	

※公益目的事業に係る費用(給料手当、福利厚生費、消耗品費、賃借料など)